

寂室元光の偈頌抄

要 旨

本稿は、わが国の南北朝時代に活動した臨濟宗の高僧寂室元光（一二九〇～一三六七）の偈頌の中から二十四首を挙げて、その解説を試みたものである。坊間、寂室の偈頌を取上げたものは、日本古典文学大系の『五山文学集 江戸漢詩集』（山岸徳平校注）に六首を収載しているに過ぎない。

寂室は、三十一歳のとき渡海入元し、杭州（浙江省）西天目山の中峰明本の禪に参じて尽大な感化を享けた。中峰は、定居なく草庵に住し船中に起臥し、標するに「幻住」を以てした。寂室は、中峰の道に参じたあと、南方中国の聖山禅匠を歴訪し、在元七年を経て帰国したが、京・鎌倉の大寺叢林に寄らず、中峰の家訓を体して林下りんかの禅者としての道貫徹した。世寿七十八歳、坐夏六十六年。世間の名利を超越したまことに純潔な高僧であった。

愚のごとき門外の徒が何故寂室の禪道に関心を抱いたかに就いては多少の理由がある。芭蕉の名高い「幻住庵記」における「幻住」の根源は寂室の謁した中峰の「幻住」に発している。芭蕉は「奥の細道」の吟旅のあと幻住庵に寓止して、此処こゝもまた仮りの宿り、「幻住」であるという生涯の観想を書き綴った。尤も芭蕉の遺語には寂室の名は見えないが、高足其角の手に成る「芭蕉翁終焉記」の文

浪 本 澤 一

中「遺骨を湖上の月にてらす」の語には寂室の偈頌の薫染が感受されるのである。即ち、同門の支考が、寂室の「死シテ在ラバ巖根ニ骨也マダ清カラフ」の一句を挙げてその傍証をしている。加うるに芭蕉をはじめ其角・嵐雪・丈草・支考等々、文人として禅法を修しており、蕉風の俳諧は禅法を除外しては理會しがたいものを内在している。愚が、仏心宗における禅とは何か、という問題とともに禅の公案を詩として表象した偈頌に就いて、年来関心を寄せてきたのは大凡以上のごとき理由に因る。

もとより禅はただ机上の読書だけで片付くような生易しいものではない。然し乍ら、ありがたいことに禅には宗派心がない。古来禅は僧俗を問わず個の日常生活裡に原点を持っている。禅は中国の唐朝中期に広大な揚子江の流域において目覚ましい進展を遂げるが、その時代の古徳は、官人から禅とは何ぞやという質問を受けたとき、即座に「汝、日々の心」と答えたという。禅には宗派心がないし、隠している何ものもないのである。門は有つて門はないのである。宋の詩人蘇東坡は夜中に溪川の声を聞いて悟道したという。その詩偈に曰はく、「谿声便是広長舌。山色無非清浄心。夜来八万四千偈。他日如何 拳ニシテ似人ニ」。

寂室の遺著『寂室和尚語録』の往古版は南北朝時代の永和三年（二三七七）に釈の沙門性均によって印行された。其の二は近世の寛永二十一年に永源住持一糸文守の「寂室和尚行状」を付録にして刊行された。其の三は元禄中の版で冠注が付されている。其の四は享保年中の版、其の五は寛延年中の版で冠注のより詳しいものである。尚、近代においては大正新脩大蔵経（八十一巻、統諸宗部十二に、瑞石山永源寺蔵版『永源寂室和尚語録』（上・下）を所収。本録は享保年中の版である。

本稿に底本として用いたのは寛延四年刊行の『重刊寂室和尚語録』（四冊本）である。

原録はすべて漢文であるが、本稿は読みくだし文に直して掲出した。

偶作

無業の一生莫妄想

瑞巖只喚ぶ主人公、

空山白日蘿窓の下

松風を聴き羅んで午睡濃かなり。

偈頌は禅の公案を頌(詩)として提唱したものである。それは詩というものの世間普通の詩とは目標を異にしており、ただ風雅を叙するだけのものではなく、必ず風雅の中に宗旨の眼目を具えたものとする。敢て理屈を言わず、天然のままに宗旨の眼目を唱出するのである。

上の偈頌は、無業と瑞巖の公案を掲げて、これを二十八言の詩として唱出している。禅の公案は「衆生本来仏」なりという、人間本具の仏性そのものを提唱して、学人の見性悟道に資するためにある。

汾州(山西省、黄河の支流汾河の上流)の無業は馬祖道一(一七八八)の法嗣。『林間録』(宋の覚範慧洪著)に「汾州の無業大達国師は一生学者の問に答へて、但、莫妄想と云ふ。是を称性の語、見道の徑門と謂ふ。而るに禅者その言を易として、反って玄妙を求む。笑ふべきなり」と記す。莫妄想は妄想すること莫かれの意。妄想は、分別妄想といわれるもので、自我に固執する我見をいう。我見は、見性悟道に入る妨げとなるゆえ、これを捨て切つて無我になり、生れたままの本来の自己に立ち帰る。それが仏性である。然るに無眼子の禅者は、この公案の端的底が見えず、言語文字の葛藤に玄妙を求め、それは笑止のことだと評している。

台州(浙江省、近くに天台山がある)の瑞巖師彦は巖頭全巖(八二八〜八八

七)の法嗣。『無門関』(宋の無門慧開著)、第一二則、岩喚主人に「瑞巖の彦和尚、毎日自ら主人公と喚び、また自ら応諾す。乃ち云ふ、惺惺著。喏。他時異日、人の瞞を受くること莫かれ。喏。喏。」とある。瑞巖の自問自答はこうである。「はっきり目を覚ましているか。はい。うっかりして、あとで人に惑わされてはならないぞ。はい。はい。」ところで、この公案における主人公を自我と見たとしたら大へんな誤解である。瑞巖自らの呼ぶ主人公は自他の二元的対立を超越したところに実在する無我のことである。生まれたままの、外からの汚れの付着しない、本来の自己のこと、仏性のことである。

頌の後半十四言は、大自在の境界に住する無業・瑞巖両禅師の無心、三昧、聖胎長養のさまを諷唱したもの。それはまた寂室禅師自らの日常底でもあったであろう。

神根の道中

怪石奇巖碧澗の流れ

白雲紅樹夕陽の秋、

吳山楚水曾て行徧す

清興は何ぞ此の勝遊に如かん。

『寂録』の注に「神根、抄曰、在備之後州藤野保」と記す「備之後州」は「備の前州」が正しい。藤野の保は大士山慈広寺(頂山和尚開基)の在った備前国和氣郡藤野村(現在の和氣町吉田池の内)である。「保」は

小聚落の意。慈広寺は、寂室が備作掩光の際に住した一寺であるが、既に早く亡して現存しない。

偈頌の「吳山楚水」は杜甫の名高い五律「岳陽樓に登る」と題する詩の第三句「吳楚東南に折け」を心においての語であろう。吳山は江蘇省と浙江省の二省を言い、楚水は壯觀な洞庭湖を境におく湖南、湖北の二省を言う。洞庭湖は、東西の両湖に分かれ、夏期における満水時の面積は五千二百平方秆（琵琶湖の八倍）に及ぶが、冬季の渇水時は約三分の一の面積に縮少する。

偈頌は、備前の山路を行脚しながら、折りから山嶽溪流を彩る紅樹夕陽の秋景を眼前にして、曾て中国の聖山勝地を広く歴遊した時のことを追懐して詠んだものである。が、中国の廣大幽遠な景観よりも故国の山水の清淑な景趣の方が懐かしく思われると云うている。

寂室は、最晩年になって近江の愛知川の奥飯高山下に梵居を営んだ際、道人に与えた一偈の詞書に「老拙一生幻影を山色水声の中に寄す」と述懐している。寂室一生の禅道は静寂な自然との契合を外にしては有り得なかつた。天然の風光そのものが現成公案であつた。

(櫪)
椎村山庵の壁に書す

澗水人間に下り

巖雲別山に過ぐ、

聊か幽鳥の語を聴けば

野僧の閑を喜ぶに似たり。

『寂録』の注に「椎村 抄曰、在備之前州」とある。「椎村」は「櫪村」が正しい。次に、その考証を簡述しておく。作州津山の藤田啓祐氏が寄せられた書簡に依れば、備前岡山藩士土肥経平の「鍬の塵」に「書す 椎村山庵壁」について、「文明の頭書、在備之前州」とあり。されど今椎村といふ所なし。則ち櫪村などか」と、櫪村の誤記とみた記録が書き留められている。「文明之頭書」は、文明中の撰である『寂録』の鈔本二卷の頭注を指す。なお氏に依れば、岡山県和気郡内に八塔寺山に到る深い溪谷の中の一集落に「櫪」という地名があり、現に住民も存するとのことである。寂室の偈頌に「八塔寺に遊ぶ」の一首もあり、和気郡一带は寂室が備作掩光の間に住した縁ふかい故地であるゆえ、「椎村」は「櫪村」の誤記と断定して間違ないであろう。

この偈頌は五絶である。試みに口語訳をしておく。

谷川の水は閑なるものと思えど

世間に流れ下って閑ではないぞ、

巖山の雲は閑なるものと思えど

別山に動き出て閑ではないぞ、

この山中に棲む一鳥の幽かな声のみが

野僧の閑を喜んでいようだ。

原作の転句に「幽鳥の語」とあり、「語」の一字に幽鳥の喜和するさまが巧みに具象されている。寂室、詩人だな、と思わせる。また結句に「閑」とあるは、ただ静かな、というだけの意ではなく、この一語に禅意がこめられている。閑は無心底の意である。無心底は、いっさいの妄

想を断絶することによって、外部からのいかなる物にも繫縛されるところのない、絶対自由な心の状態をいう。禅の目標は、心的活動の絶対自由を享受することであり、何ものにも隷属しない自己の主人公になることである。およそ以上のごとき意味を内在した「閑」である。

芭蕉の『嵯峨日記』に「憂き我をさびしがらせよかんこどり」の一吟がある。文人芭蕉の希求した心地も閑であって、禅僧寂室の住する閑の境界と等質のものであり、その願うところは心的活動の絶対自由を享受するにあつた。

関西の龍侍者は、高標清致、真の叢林の頭角たる者なり。山中に道聚して共に枯淡を守る。遽爾として別れを告ぐるに偈を以てす。仍りて与に韻を次ぎて、其の行色を壮にすと云ふ。

雪後の諸峰翠嵐を発く
寒梅初めて綻ぶ野村の南、
岐に臨みて一句、只、這是
三喚機前に眼を著けて参ぜよ。

関西の龍侍者が寂室禅師の寓止する山中にやって来て、林下の禅に参じ、別離に際して一偈を呈した。寂室は、これに韻を次いで、侍者の旅立ちを盛んにした。

この偈の起句「翠嵐」は、雪後の晴天に望む青山であるゆえ、山色の一入映えるさまである。承句の「寒梅」は、野村の南であるゆえ、寒気の厳しい時節、すでに綻び初めた梅花である。寂室において「青山」と「寒梅」は無心の伴侶であつた。転句の、岐路に臨み「一句、只、這是」は前句の「青山」と「寒梅」を直指する。この偈の眼目である。

南陽の国師慧忠（六祖慧能の法嗣、唐朝の高僧）は、ある日、侍者を三度喚んだ。そのたびに侍者は間違わずに「ハイ」と返事をしたが、師の忠は言った。「間違つたのは私だと思つていたが、お前の方が間違つていたので」と。ところで、忠の終りのことばは通常の論理的な見方からすると、理解に苦しむものである。然し禅が論理の否定を敢て行うことは珍らしいことではない。何故か。禅は常に相対的な論理の上に出ることを欲する。禅の求めるもの、それは肯定と否定の二元を超越した処に在る大肯定の境界である。この絶対的な境界を参究するのが禅の目標である。

忠の示した公案は禅が吾人の日常生活裡のごく普通の存問の中に顕露していることを暗示している。禅は、哲学のごとき形而上の学問ではなく、境界の上での直覚的な洞察である。ところで、寂室の「三喚機前」は、この日常生活裡の公案さえも止揚して、さらに其処から出ることを示唆している。即ち、いっさいの言語の葛藤を超えた、天然の風光そのものが現成公案であることを述べている。まさにその当処にこの偈の眼目がある。

師は別れ路に立つて言う。侍者よ、汝のすぐ前に雪後の青山が輝き、

汝の脚下に寒梅が清香を放っているではないか。青山と寒梅と、天然の姿そのままが自性の現れに他ならない。「只、這是」である。その当処に著眼して、林下の修行を積み、汝の自性領解を遂げよ。汝に示すことはただそれだけで他に附加すべきものは一物もない、と遠来の侍者の旅立ちを親切に励ましたのである。

重陽

晨を凌ぎ葉を掃いて庭際に立つ

籬落の西風に露は裳を湿す、

時に山童の来りて菊を採る有り

報じて言ふ、今日是れ重陽と。

「重陽」は陰曆九月九日の菊の節句。九は陽の数で九の重なる日であるゆえ重陽という。「西風」は秋風の意。

師の山院の閑居に暦日はなかった。五山の詩に見るごとき技の巧緻を離れ、その時の感興を素朴に唱っていて、まことに快い。人間的な温もりの伝ってくる作であって、詩趣とともに一味の俳趣をも感じさせる。

三月尽

限りなき風光已に索然

残花なほ自から庭前に舞ふ、

春帰りはは定めて重ねて来たる日あるも

人老いては何ぞ曾て復少年ならん、

幻跡は多く青嶂の裏に留め

幽懷は常に白雲の辺に在り、

閑窓に昼永くして歳を経るが如し

椽斂を課し罷んで几に隠れて眠る。

寂室は限りなく天然の美を愛した禅者である。禅者であって生来の詩人である。この二つは寂室においては一元化されていて間然するところがない。

この偈の形式は七言の律である。首聯二句は、春まさに逝かんとする日、残花なお庭上に舞うと、暮春の寂然たる風光を叙している。次の頷聯二句は、惜春の情に寄せて、行く春はまた帰り来る日のあるが、人間の老年には再び少年に帰る日はないと、倏忽として過ぎ去る人生の哀感を唱っている。以上は人間寂室の詩人的感傷とも言うべきものである。

其処から一転して、頸聯二句は、青山白雲を無心の友として生きてきた禅者としての大道を叙している。そして尾聯二句における心境は枯淡にして、まことにからりとしたものである。閑窓に昼永くして、几に隠れて眠る、の境界は造化に帰入した人間だけに許される円融無碍の世界である。椽斂は寂室が常に諷唱した經典。『寂録』の注に「我祖常に此の經を觀る。時人、師を稱して山上の椽斂と呼ぶ」と記す。

『碧巖録』第七八則「十六開士の入浴」は椽斂の二十五円通の一つを挙げての公案である。入浴してただ身体の垢だけを落すのは世間の常人である。入浴にあたって、身体の垢と共に心靈の垢を落そうとして、

忽ち水因を悟ったのは十六開土中、跋陀婆羅菩薩一人であったと記す。また、第九四則「楞嚴見ざる時」は、阿難尊者の女難を扱った公案で、この經典は禅学修行者の読誦すべき尊い經典とされている。

九月十三日、田原村に遊び、宿を

茅舎に投ず。同來の諸弟皆肱を曲

げて寝に就く。独り窓を開き月を

観て、聊か老懷を写すのみ。

戊子の季秋、將に半ならんとする日

田原村裡煙蘿に宿す、

看來たる五十余霜の月

幽興は今夜の多きには如かず。

『寂録』の注に「田原村 在_三作州英田郡_二」と記す。田原は岡山県英田郡江見庄田原村である。その地は作州の東端、播州との境に在る小村で、杉坂峠を関門とする山中である。「戊子の季秋」は、『寂録』の注に「人王九十七代伏見院の貞和四年」と記す。その年次は一三四八年で寂室五十九歳の秋に当る。一糸筆の「行状」に「大元より還りて二十五歳を備作の際に在りて積む」とあり、帰国の嘉曆元年（一三二六）から觀応元年（一三五〇）の六十一歳まで備作の間に翫光していたのである。

この一偈は、寂室林下の禅を慕って同行した諸弟子と作州の寒村に出遊し、草深い茅舎に宿して、一夜、清話を交わした時の感懷を叙している。ようやく諸弟子の寝に就いたあと、独り窓を開き九月十三夜の月に

対する禅師。曾て異国で觀た月、故国の山中で觀る月、寂室の胸裡にはさまざまの感懷が去來したことであろう。諸弟子を引き連れての清遊は寂室にとって楽しい一夜であったことを思わせる。

山居

名利を求めず、貧を憂へず

隠るる処は山深くして俗塵に遠ざかる、

歳晚天寒うして誰か是れ友

梅花月を帯びて一枝新なり。

林下の禅者寂室の全貌が何のこだわりもなく、天然のままに顕露している。まことに清すがしい偈である。起承二句は生涯の行実をさりげなく叙しているが、このことばを貫いているものは寂室の厳しい禅骨であることに気づかなくてはなるまい。その清淑な為人が險峻な修行の内側を表に出していないだけである。かかる意味において起承二句の内容はまことに重い。転結二句は、山居の眼前を唱って、寒月に冴える一枝の梅花が好箇無心の友であると言っている。

この偈の眼目は転結二句にこめられている。月下に聞えてくる梅花の清香。禅の真理は身近かな日々の生活裡のきわめて具体的なものうちに顕露する。それはわれわれのような門外の徒に対しても、明々白々、隠している何物もない。

長勝の専使禮禅者に贈る

使なる乎、使なる乎、命を辱しめず

佳声すべから須く是れ叢林に播すべし、

情を尽し話して吾が師席に到る

月下の寒蟄かんしやう夜の深ふかくするに咽ぶ。

この一偈は長勝寺の請命を伝えるべく寂室の寓居を尋ねてきた使者の禪者に贈ったもの。この寺の開山は約翁即ち仏燈国師であって、仏燈の法嗣はつす中もつとも声望の高かったのが寂室禪師である。前書に、使者を専使と呼び、禪者と称しているのは、ただ寺命を伝えるだけの乾燥な使者でないことを強調しているのである。

偈の起句は、誠実な使者を迎えた感動を繰返し叙し、この使者の佳声は広く叢林に伝播するであろうと、その高尚な人柄を讃えている。転句は、使者が叢林時事の模様を熱心に話したあと、約翁の遺席である長勝寺の住持に坐してもらえぬかと、本題に及んだことを叙している。その一夜の状況を括って、「月下の寒蟄夜の深ふかくするに咽ぶ」と唱ったのが結句である。「寒蟄」は、蝸ひぐらしといい、蟄こもるというが、ここは古人も蟄と定めている。初秋の夜も更けゆく月下に咽ぶがごとく鳴きしきるもの、それは蟄であるとともに使者の情理を尽した話に感動した寂室自らの胸中であったと察せられる。

近江永源寺に蔵する「紀年録」に「観応元年庚寅、師六十一歳、七月九日、長勝寺の請命あるも就かず」と記す。

寿聖の養直和尚の来論に酬い、兼

ねて同門の諸法兄に簡して、長勝

の命を辞す。

嘉音かいん両度林巒りんらんに到る

午眠を驚かし起して竹関を開かしむ、

語を寄す竜峰下の頭角

一生我を放ちて安閑を得しめよ。

前書は、老宿の和尚が寂室の寓居を訪うて、重ねて長勝寺の請命を伝えたのに対して、その懇情を謝し、併せて仏燈派下のお歴々に偈を以てし、長勝の命を辞退するとの意である。

寂室は、叢林上堂の説法は心身を勞するゆえわが性に適しないと、師の遺席である長勝の請命ではあるが、重ねてきっぱりと是れを固辞したのである。長勝の命を辞するほどであるゆえ、終生いかなる名藍の請命も是れを受けることなく、林下の禪者としての所信を貫道した。寂室とはかかる禪者であった。

室山むろやまに花を見る韻

野興人を催して青昼長し

行きては見る岩院満庭の芳、

僧は玉樹の院中より過ぎ

鶯は瑤葩えうはの重き処に在りて蔵る、

砌を擁して応に山月の色を添へ

窓に飄りては又瓦炉の香を助く、

老来好景多く遇ひ難し

眼は風光に酔うて心狂せんと欲す。

『寂録』の注に「室山 在播磨州揖西郡、呼室津。山有賀茂大明神、社」と記す。

寂室の偈頌は水墨の筆致を思わせる作が多いのであるが、この七言律の頌は珍らしく色彩を施した艶麗な描写をしている。静寂な山院の庭域一面に八重桜の花が咲き満ちていたのである。その時の感動を集約したのが尾聯の「老来好景多く遇ひ難し、眼は風光に酔うて心狂せんと欲す」である。寂室の自然美への風狂の精神は近世における芭蕉の風狂に一味相通うものがあり、一入興趣を覚えさせる。

さて、この頌の口語訳を添えるに当り、その前に翻訳に対する先賢の見識を記しておく。岡倉覚三の『茶の本』は小著にして含む所の多い本であるが、その中に「翻訳は常に叛逆であって、明朝の一作家の言の如く、よく行ったところで只錦の裏を見るに過ぎぬ。縦横の糸は皆あるが、色彩、意匠の精妙は見られない」とある。このことは訳詩において特に痛切であり、原詩の風韻を変質させ、時には消滅させてしまうのである。別して漢体の詩を七五調、五七調の新体詩紛いに和訳するがごときは自惚と甘えもまた甚だしいと言うべきであらう。しかし、古来漢詩の和訳がきわめて稀に成功を遂げている実例もあることはある。が、それはも

はや原詩に縫った訳ではなく、その人の妙くもめでたき創作に化現している場合である。斯かることを心得ぬわけではないが、敢て上掲の頌に拙い口語訳を試みるのは、痴人の笑うべき婆心とも言うべきものである。

室山の花

春の日永をどこまでも遊行して

ここ山院の庭に八重桜の咲き満ちるを見た、

僧は繚乱たる花林の中から現われ

鶯はたわわに揺らぐ花陰にひそんで啼く、

日の入るや、庭の鶯に山月の色は映え

窓に飄る落花は炉端の喫茶に香を添える、

老来、佳景に巡り遇うこと尠ければ

眼は風光に酔うて心も狂わんばかりであつた。

靈叟和尚に寄す

兵庫福殿に在りての作

我が此の門頭市塵に接す

那ぞ日日事の紛然たるに堪へん、

百錢買ひ得たり、一柄の鑊

去りて青山を鋤きて暮年を安んぜん。

觀応二年（一三五二）、六十二歳のとき摂州兵庫浦の福嚴寺（この寺は神戸市兵庫区門口町に現在する）に錫を投じた。この寺には法兄の靈叟太古が住しており、親しい間柄であった。が、寺門の周辺には町屋が建てこんでいて、その喧噪は青山の人間である寂室には堪えられなかったらしい。やがて静寂な禅院へと錫を転じたのである。

ところで、この一偈の眼目は転結二句にこめられている。「一柄の鏝」とあるは無作の妙用を象徴する謂わゆる禅語として用いられている。百錢を出して鏝など買ったわけではもとよりのない。それは詩としての文飾というもの。要旨は「空手にして、一挺の鏝わが手に在り」である。鏝を持っていて、然も持っていないのである。空手にして鏝を把り、青山を鋤く、と挙げた当処に寂室独自の禅が感得される。禅がこのような超論理的提唱を行うことは、日常底のことであって、特別のことでも珍らしいことでもさらにない。二元的論理の繫縛を止揚することが即ち精神上の解放であって、いっさいの精神上の分裂を超えるのである。この偈の結句「去りて青山を鋤きて、暮年を安んぜん」は精神の絶対的自由の提唱である。

西禅寺に宿す

火後の西禅寺

門庭灰よりも冷かなり、

井河の聲、寂寞

嵐嶠の碧、崔巍、

唯山雲の宿するのみ有りて

渾て俗駕の來ること無し、

上方の老禅伯

古格復追回す。

「西禅寺」は洛西嵯峨の天龍寺の前方に在ったが、早く亡して今はない。「井河」は大堰川。「嵐嶠」は嵐山。「上方」は禅寺の住持をいうが、ここは地位の高いという意。「禅伯」はすぐれた禅僧。

觀応二年（一三五二）、西禅寺に寓止したときの偈である。この偈は五言の律であって、頷聯と頸聯はそれぞれ對句から成っている。首聯の第二句「門庭灰よりも冷かなり」は、第一句の「火後」を受けて、西禅寺門前の寂寞感を描写している。頸聯の「唯山雲の宿するのみ有りて」と「渾て俗駕の來ること無し」は、景觀と人事の相和していかにも禅林にふさわしい閑寂な状況である。この頷聯の對句にこの偈の眼目がある。尾聯は、寂とした西禅寺に住する老僧に古徳の風格あるを敬慕している。禅者寂室の為人を偲ばせる一偈である。

戊午の中春、榻を東禅の客檐に借

りて、匂を渉りて留ることを作す。

偶、花嶽庵に遊びて心公法兄を訪

ふ。其の韜鍠の韻致を觀るに、瓊

亮の高風を幾追配す。愚、謾に江

湖に遊びて、二十載に垂んとす。

未だ^六帰休の計を得ざるを媿と為す。

紫栗^七青鞋、他日、重ねて来りて公

に水辺林下に従はんもの、愚に非

ずして誰ぞや。因りて^八俚語を述べ

て、其の志を紀すと云ふのみ。

一 寥寥たる清夜幽情に適ふ

二 蘿月松風孰と共にか争はん、

覚えず欄を敲きて^三舒に一嘯すれば

知音は只曉鐘の声のみ有り、

春は^五焼痕に入りて紫蕨肥え

七 籃を携へ、杖を曳きて禅扉を出づ、

袖中の辣手未だ拈出せざるに

九 拳を豎つる那の一機に輸与す、

此の生、^二隠約して寒巖に倚れば

三 流涕収め難くして口緘むに似たり、

幽鳥は知らず頻りに話墮することを

乱峰影裏に、語、^四呢喃たり、

潤水旋添ふ茶鼎の湯

一六 山花時に助く石楼の香、

一七 破蒲団の上に余事無くして

又見る林巔に夕陽の挂るを。

一椅子に似たもの。和尚の腰掛をいう。二「檐」は、ひさし。三光をつつみ、彩をけずる。学才を表に見せないこと。四唐時代の古徳南嶽と西山亮のこと。前者は湖南省の南嶽(衡山)の石窟に隠れ、後者は馬祖の法嗣で江西省

の西山に隠れた。五江は揚子江を指し、湖は洞庭湖を指す。馬祖道一は江西に住し、石頭希遷は湖南に住し、当時の雲水は江西・湖南に集まった。これ

より転じて、雲衲の集まる所を江湖と称した。唐朝において、支那南方禪の栄えた地という意。六山中に隠棲する境界をいう。七「栗」は柳(檜)栗、即ち拄杖で、禅僧の携行する法器。「鞋」は行脚用の草鞋。「紫」と「青」は美

称語。八自詩を謙退して里ことばと言った。

一寂然たるさま。二蔦の葉に照る月。三詩を微吟するをいう。四親しい友人。文選、卷二に「昔、柏牙は絃を絶ち、以て知音に遇ひ難きを痛惜せり」とある。即ち、柏牙はよく琴をひき、友人の鍾子期はよくその音を解した。

この友の死後、柏牙はその音色を知る者なしと、琴の絃を絶ったという故事に拠る。五冬、山を焼いた跡地。六紫玉を結ぶ蕨の意。後句の拳を立つに掛

る。七竹かご。八辛辣な手腕。九蕨が拳頭を立てるをいう。一〇譲るの意。

一一世間から身を隠して修行するをいう。一二ここは鼻水の意。寒涕。一三失言。無門関、第三九に「雲門話墮」の公案がある。一四幽鳥の甚だ饒舌なるをいう。一五茶釜。一六香爐。一七破れた坐蒲団。坐禪の數物の使い古されたものをいう。

前書の冒頭の「戊午」は、文保二年(一二二八)、寂室二十九歳のときで、美濃の東禪に十日ばかり投錫した。その機に近くの花嶽庵に隠棲している法兄心公を訪うた。次に、「他日重ねて来りて、」とあるよりして、

前書と偈頌は再度の来訪の時の作で、その年次は、文和元年壬辰(一二三

五二)、寂室六十三歳のときに当たる。また前書に「江湖に遊びて二十載

に垂んとす」とあるは、江西・湖南の諸地を歴遊帰国してから二十年近

に垂んとす」とあるは、江西・湖南の諸地を歴遊帰国してから二十年近

くなるという意に解されるが、「二十載」には疑義が残る。寂室東帰の嘉暦元年（一二二〇）から数えて文和元年は二十六年目になる。思うに「二十載に垂んとす」は伝写の誤りによるもので、「三十載に垂んとす」が正しいと考える。

この長詩は、法兄心公の上にかけて、寂室自らの志を述べたもの。山中深く隠れて孤寂を守る林下の禅に和した頌であって、独り心公の上だけを叙したものでなく、心公と寂室が一元に重なった心象を自在に叙している。心公の林下はそのまま寂室の道であることを韻々と響かせている所にこの頌の感味のすべてがある。

頌の二行目の「蘿月松風就れと共にか争はん」は、両者ともに対立して相争う何物をも持たないというので、蘿月も松風もそのままに仏性の現成体として把住されている。古句に「松風般若と談じ、蘿月真如を照らす」とある。三行目の「覚えず……一嘯すれば」とあるは、この幽寂な禅院が心に適って、思わず欄干を敲いて一詩を微吟すれば、という意である。こうした一句に接するとき、寂室は禅僧であるとともに天与の詩人であることを思わせる。四行目の「知音は只曉鐘の声のみ有り」は、山中の寂寞たるさまで、曉鐘の声だけが知音であるとの意。当処に伯牙と鐘子期の故事を響かせている。

五、六句の「春は焼痕に入りて紫蕨肥え、籃を携へ杖を曳きて禅扉を出づ」からこの頌の本流に入る。即ち、心公の日常底に重ねて自らの心象を述べている。七、八句の「袖中の辣手未だ拈出せざるに、拳を豎つる那の一機に輸与す」は、焼山の跡に太く萌え出た蕨の拳頭を立つるを

見て、機先を制せられたと独笑し、次の四句を起す伏線としている。拳頭豎起は師家が学人の言語文字に繫縛されるを破碎するための一手段として用いられる。只這是である。

九、十句の「口緘む」は、季節は陽春であるが、山中の巖下に寄れば、冷風肌にせまり、鼻液の垂れて口を封じるをいう。この「口緘む」に、無言無説の当処を示し、次句の「幽鳥は知らず頻りに話墮す」と、その徒らに饒舌なるを対させている。

さて、最後の四句は心公の庵中における日常をいう。茶釜に沸き立つ湯にそそぐ溪谷の水、香炉から立ちのぼる香をたすける山中の花。また、破蒲団に坐禅三昧にいる心公と夕陽に映える林嶺。心公と山中の自然と境界一元の当処を叙して、一篇の長詩を結んでいる。

友山

茫茫たる塵世は知己少なく

眼界蕭条として秋よりも冷かなり、

渠儂が真の伴侶を見んと要むれば

千峰万壑、碧、眸を凝らす。

この偈頌に「知己」とあるは禅道の上で機々相契う友人をいう。「渠儂」は彼我の意。この彼我相對の關係にある世間において知己を得ることとは容易ならざることである。一生の間に一人の知己も得ずして終るかもしれない。しかしながら、天然のままに在る山は無心底であるゆえ、こちらの境界が山の心を体するに到れば、山はいつでも真の伴侶となつ

て迎え入れてくれる。寂室は青山の人間と評されるほど山中の幽静を愛した禪者であって、この偈も無心底の山を仏心の当体として観相した現成公案として成っている。次に、拙い口語訳を試みておく。

山を友とする

名利の塵に染まった世間にあつて

真実の友を求めるとは容易でない、

このような思いを抱くとき視界は索莫として

秋の気よりも寒ざむとした冷気をはらむ、

然もあらばあれ、真実の友を求めたいと思うなら

眸をこらして看よ！

大空に連互する数かぎりない山やまが

遠く近く碧一色に輝きながら

どの山も、どの山も、汝の友になりたいと、

山もまた眸をこらして

汝をただ見詰めてくれているではないか。

寒夜の即事

風は寒林を攪して霜月明らかなり

客来りて清話三更を過ぐ、

炉辺に箸を閑いて芋を煨くを忘れ

静かに聴く窓を敲く葉雨の声。

この偈の起承二句は、風が枯林に鳴り、月の明るい霜夜に、道友を迎

えて三更(午前一時)を過ぎるもなお清話を交わしたことをいう。転結二句は、火炉の灰に芋を埋めておいたが、芋の焼け上るのも忘れて、窓をたたいて雨のごとく降る落葉の声を静かに聞くと聞くというのである。林下の禪者寂室の日常底が象徴的に語られていて、まことに懐かしいもの。

『林間録』に「唐の高僧、嬾瓚と号す。衡山の頂、一石窟の中に隠居す。徳宗その名を聞きて、使を遣りて、詔を馳す。詔の使者、その窟に即りて、宣言す。天子詔あり、尊者幸くば起ちて恩を謝せと。瓚、方に牛糞の火を撚して、煨芋を尋し之を食ふ。寒涕膺に垂れ未だ答へず。使者之を笑ふ」と記す。寒中、温い焼芋を食べて、鼻水が胸のところまで垂れてきて、早速には応答に及ばなかったのである。「使者之を笑ふ」と記す。脱俗の禪者と乾燥な俗吏との対象がいかに面白く語られている。

曇浚の相陽に之くを送る

こころは竜峰に到りて身は到らず

余生已に鬼と隣を為すに近し、

如今喜び得たり、子が前に去ることを

我に替りて能く塔下の塵を除け。

「曇浚」は俊鈍庵のこと。寂室一生の道友。寂室の「鈍庵和尚」と題する拈香語に「早に覚雄声前の三呼に応じ、大鑑の門に遊びて真浄堂の一衆を首領す」と記す。建長寺の開山隆蘭溪の法嗣無隠円範を覚雄禪師と称する。鈍庵は初め無隠に従い、中国において大鑑禪師の清拙正澄の門に入り、松江(江蘇省)の真浄寺で一衆の主座を務めた。清拙正澄は嘉暦

元年（一三二六）、北条高時に請せられて来朝し、建長寺等の名刹に住した。「龍峰」は建長に住した師約翁の東庵の名で、約翁のこと。

『寂録』の偈頌は必ずしも年次別に配列していないので、この偈なども制作年次が定かでない。が、「余生已に鬼と隣を為すに近し」とあるゆえ、だいぶ晩年になってからの作であることはまちがいない。寂室の偈頌や語類には鈍庵の名が幾度も現われ、両者の間に親密な道交のかわされたことは想像できるのであるが、鈍庵の足跡に関しては殆どわからない。

この一偈は、鈍庵が寂室に先立って鎌倉へ往くに際して、自分に代わって約翁の墓前の塵を払ってくれと懇請したのである。

備前の要侍者、予に偕ひて但の金

藏山に寓す。冬より春に迄。忽

ち一日、辞して京都に往く。俚語

以て贖別に代ふと云ふ。

子病夫を伴ふ金峰索寞

雪に対し炉を擁し口辺に醜を生ず、

三玄三要商量するに嬾し

四句百非渾割却す、

今朝、又春雲を逐うて帝郷に帰る。

何の日か相逢うて山月の白きを看ん。

「子」は要侍者を指す。「病夫」は寂室自身をいう。「醜」は、かび。

口辺にかびの生ずるほどに無言のさまをいう。真性体得の人の、自然に任せて罣碍ない無作の妙用を暗示した語。「三玄三要」は、臨済義玄禅師が学人接待に用いた手段。一言一句、一挙手一投足に幽玄重要の意の有るを説く。「四句百非」は、いっさいの言語の意。衆生の迷執を破却するための推論形式を以て成る。

寂室が、美濃から備前の明禅寺に暫く下り、但馬の金藏山に入ったのは延文元年丙申（一三五六）、六十七歳の頃と推定して大凡誤りはないであろう。寂室は晩秋にこの山に入ったが、旅の疲れで引いた風邪をこじらせてしまったようである。備前から随従して来た要侍者は、師の看病をしながら冬を越し、師の体が軽安になったのを見て、春の頃に京都へ向かって旅立った。その別離に際して与えた一偈である。

この偈は自由な形体で自在に唱われている。最初の二行は、山中での雪の夜、師と弟子とが炉辺にうずくまって、冬籠りをしているさまである。師は、風邪の余後がまだ残っていて、時たま枯れた咳をし、そのあとは深い沈黙の中に炉火だけがちろちろと燃えている。

次の二行は、「口辺に醜を生ず」の語を受けて、臨済の「三玄三要」を問答することも物憂く、また「四句百非」の面倒な推理もすべて放棄して冬を過したことを述べている。但し、「口辺に醜を生ず」の語に百千の問答にもまさる禅の境界のあることを暗示しているのである。

最後の二行は、ようやく冬も過ぎ、草木の息吹は春の訪れを告げて、侍者は京都へ旅立って往く、その別離のことばを記している。ところで、この偈の眼目は結句の「山月の白きを看ん」にある。「白き」は生

地の白地ということ、欲塵に染まらない自性そのままを顕露しているのが月であるという意である。即ち、月は真如自性の象徴としての月である。法理をいかに追い詰めてみても、それは月を指すゆびであって月そのものではない。ただ知識に使われ知識の奴になつてはならない。禅の目標は法理を追うことよりも自己の境界を鍛錬することによって、自性了解を遂げることである。寂室は、侍者に対して、怠らず参究辨道して自己の境界を鍛錬し、本来の自己を磨き出すことに努めよと、別離に際してその行を励ましたのである。

金蔵山の壁に書す 二首

此の閑房を借りて恰も一年

嶺雲溪月枯禅に伴ふ、

明朝下らんと欲す巖前の路

又何れの山の石上に向ひてか眠らん。

金蔵寺の閑房を借りてちょうど一年になる。山嶺の白雲と溪谷の月は老禅者の自分にとって無二の伴侶であった。病氣も癒えて体が軽安になったので、いよいよ明日の朝は山を下ろうと思う。さて、また何処の山房を借りて閑を得ることであろうか。後半の十四言に「巖前」とあり、「石上」とあるは、林下の禅に定居なく、移り行く処がすべて幻住であるの意を響かせての表象である。

風は飛泉を攪して冷声を送る

前峰月上りて竹窓明らかなり、

老来殊に覚ゆ山中の好ましきことを

死して巖根に在らば骨也清からん。

深く山中の幽静を愛した寂室の為人を思わせる偈である。心境の澄徹は是れを詩として観照しても詩の極限を羅針している。この一偈、禅林のみでなく広く人口に膾炙し、骨寂室と称された名高いものである。

戊戌の秋、初めて宿を馬郡の如意

寺に投ず、檀那明海一見して故の

如し。掌を拍ちて清談し、秋宵猶

短し。仍りて一偈を留めて去る。

他日、之を取りて見れば、則ち余

に対すると同じからん。

馬村の信士、明海と号す

家中に在りと雖も出家に勝れり、

只、道情堅密にして去らしめば

那ぞ憂へん、鉄樹の花を開かざることを。

延文三年戊戌（一三五八）、六十九歳、初めて遠州の馬郡村の如意寺に寓止して、檀越の明海に与えた一偈である。その前書に、清談熟するゆえに秋の長夜もなお短く思われたと言っている。偈は、初対面の明海を「馬村の信士」と称し、在家の身ながら塵世に染まらず、その節操の正しいことは出家に勝ると礼賛している。常に道懐堅固にして参究の功を

積めば、一切の差別的見所の城壁を悉く撤去し尽し、大安心の境界に住することができる、明海を励ましたのである。

釈宗演老師は、「鉄樹花を開く」について、「俚言の所謂炒豆に花と云ふことぢや。冬季百花草枯れ尽し、万樹ただ松柏を羨むの時に当りて、一時に百花爛漫として、満目はれ春色を呈し得る底のことである」(碧巖録講話)と説く。即ち、『碧巖録』第四十則、垂示に「休し去り歇し去り、鉄樹花を開く。有りや、有りや、黠兒落節」とある。「休歇」は、いっさいの妄想を放下し、大安心の処に休息することをいう。さて、皆の衆の中に、この公案について、話し手になる程の輩が居るか、居るか、秀才は却って落第するぞ、とある。宗演は「この第四十則は、白隠門下に於いても極めてやかましい難透の公案で、南泉下の一株花と云ふのが即ちこれである」と言い、「専門家においても大いに力を要する牢関である」としている。

次に、如意寺に關して付言しておく。遠州の馬郡にこの寺は現存しない。吉田東伍編『大日本地名辞書』(明治三三〜四〇年刊)の浜松市馬郡町の項に「寂室語録に、延文三年戊戌、如意寺に投ずとあるは、大悲院觀音堂のことか。馬郡の東なる坪井觀音堂は大悲院といひ、昔は名高き辻堂なりしとぞ」と記す。

清見の方崖和尚、一偈を寄せらる。

折いて四絶を成して、之に酬ゆ。

竜寿山中の老古錘

人間得難し、箇の頑痴、

今朝、自笑して籃を携へて去り

栗を拾ひて餐する時皮を剥ぐを忘る。

「清見」は駿河(静岡県)にある清見寺。「方崖」は約翁の法嗣方崖元圭、寂室の法兄に当たる。「四絶」は四首の絶句。上掲の偈頌はその第一首。

延文四年己亥(一三五九)、七十歳の秋、遠州(静岡県)の野部に閑居した。野部(豊田郡豊岡村)は永安寺の境内地である。『寂録』の注に「龍寿山永安寺は我祖開創の道場なり」と記す。

偈頌の「老古錘」は、使い古した錘の意であるが、ここは圭角のとれた老宿の禪人を敬して言った語。「栗の皮を剥ぐを忘る」は、無心底を言ひ、心身脱落の行底である。野部の山中には、このような老宿も居て、道人の相会する禅院ができていたのである。寂室在世のときは永安禅院であつて、まだ寺ではなかつた。

翼姪、石塔の客舎を訪ふ

道人雪を踏みて寓舎を問ふ

月は寒窓を照らして坐して牀に對す、

瓦鼎に茶を烹て春一盞

豈政老の橘皮湯に同じからんや。

「姪」は、法姪のことで、法兄、法弟の弟子をいう。「牀」は連牀。佐

佐木陵西氏に依れば、「政老」は中国北宋時代の禅僧惟政（九八六—一〇四九）のことで、五燈会元、第十に所出。月見の席で客人の詔禅師が空腹を訴えて、菓石（たごはん）を欲したとき、惟政が橘皮湯を煮て菓石代わりに出したという故事。「橘皮湯」は蜜柑の皮を煎じた湯。

延文四年己亥、七十歳の冬を江州石塔教寺に寓止した。折りから道人の翼姪が遙々雪路を踏んで、山中の師を尋ねてきたのである。この偈の眼目は後半二句にこめられている。師は、雪を凌いで来訪した道人の寒夜の情を稿うために自ら茶を煮て、「さあ、一服」と、一椀の茶をふるまい、「政老の橘皮湯よりはまだまだましぢや」と、微笑をもつてことばを添えた。禅の心はこういった極く身近かな日常底裡に現われる。「橘皮湯よりはまだまだましぢや」の一語に、寂室林下の禅が汲みとられる。

『寂録』の注に「江州蒲生郡、瑞石を去る殆ど二里、阿育王山石塔教寺在り」と記す。

西明寺の壁に書す

去年此地の花を尋ねて到る

今日又看る黄葉の秋、

嶺上の白雲凝りて動ぜず

自ら慚づ衰朽の閑游を好むことを。

頽齡の身となつて、なお春秋の風光に憧れるのを、嶺上の白雲の動ぜざるを見て、自ら恥じるとの意である。寂室の素心の顕露した懐かしい頽である。師の偈頌には青山とともに白雲の語がしばしば出てくる。例

せば、天関老兄（濃州、莊福寺開山）に贈った一偈にも「白雲は是れ実に無心の友」とある。

因に、芭蕉晩年の旅の句に「比の秋は何で年よる雲に鳥」の名高い一吟がある。寂室は禅僧、芭蕉は文人であつて、同じく造化の美を愛するといつても、個の目標とする処は異なるが、両者における幽寂な自然への心理的傾例には一筋相通うものが感受されるのである。

『寂録』の注に「西明寺、江州蒲生郡に在り、瑞石を去ること二里」と記す。この寺、滋賀県日野町に現存する。

老拙、一生幻影を山色水声の中に

寄す。邇来古江の飯高山下を經由

するに、林壑幽邃にして頗る野情

に愜ふ。因つて室数椽を築いて安

眠燕坐す。只比に居して残喘の尽

くるを俟つのみ。旋空閑を愛樂す

る道流の有りに、憧憧として杳な

り疎りて、松根石上に茅を誅りて

散処す。蓋し物は類を以て聚まる

こと理の然らしむる所以ならんか。

関西の薰聞叟も亦其の一なり。夫

為人爽拔精敏にして、孜孜として

道の為めにする真の佳納子なり。

時有りて従容として語りて曰はく、昔、親を辞し郷を離るるの日、自ら謂へらく、吾早に大方に徂きて撻草瞻風し、良道善友に依棲して、晨夕已事を究明して父母劬勞の恩に報じ、仏祖覆蔭の徳に躋いんとを。幸に名藍に挂錫すること荏苒茲に十霜。同じく伏臘を閱すること五七百衆に下らざれども、其の一人を挾びて將って言行の師と為さんと要むるに届りては、何ぞ止波を撻いて火を求むるが若くなるのみならん哉。凡そ見聞に属くは唯に菩提の種子を焦敗するのみにあらず。殆ど輪廻の業根を滋潤すべし。深く知る、今時一日も出でて衆に随はば万劫に利を己に失はんこと必せり。因って憶ふ、古人の法席全盛の時すら尚名跡の累を逃れて、茅茨・石室・果食・澗飲して、終身世と遯如たることを嘗て聞けり。僧の為には須く是

れ巖谷に居すべし。又云ふ、柳栗横に担ひて人を顧みず、直に千峰万峰に入り去ると。吾、今忝くも隱哲の勝軌を攀じて衣を払ひて遠く引きて永く雲山深く更に深き処に帰る。乃ち竊かに自ら誓ふ。寧ろ身を將って火坑に投ず可くも復脚は叢林の閫を跨がず。寧ろ荒藪の下に窮死すべくも措紳豪富の門に謁せず。寧ろ枉げて断舌の災に遭ふべくも未だ悟らずんば般若を妄談せじと。予、其の詞の至当痛的なるを聴きて、覚えず涕下りて嘉歎すること之を久しうす。仍って筆を迅らせ記取して、之に系るに二十八言を以て贈ると云ふ。

西山亮去つて唯幽谷

南嶽瓊亡じて空しく白雲、

清標高格を追慕する者

又巖下に來りて独り君を尋ねん。

一適している。二ある時は安らかに眠り、ある時は安らかに坐る。無碍自在のさま。三残生。四跡の絶えざるをいう。五身命を仏道に捧げている僧。六

大道のこと。仏道。七名高い寺院。八室中において、法器の錫杖を壁牙に挂けること。九夏冬。暑寒を厭わず、修行に励むをいう。一〇五、七、百は、数を絶した世界を意味する。衆は僧の意。一一仏陀正覚の知恵。即ち仏果のこと。一二和尚の説法する会座。一三僧の法器である拄杖（しゅじょう）のこと。一四手本とすべき道。一五衆僧の集まっている大寺。一六知恵と訳す。仏法。

延文五年（一二三六〇）、師七十一歳のとき、近江の太守佐木雪江居士が師の名行を慕い、猷ずるに奥島・雷溪の二境を以てし、「斯の二境は吾が州山水の眉目なり。師、性に任せて居せよ」と、師の来訪を懇ろに請した。翌康安元年（一二三六一）、師七十二歳の春、太守に答えて湖東の奥愛知川の上源に位する雷溪に杖を曳き、その地相の幽寂なるを見て素抱に適い、この地を終焉の処とすることを決定した。偈頌の前文の初めに「邇来古江の飯高山下を經由するに、林壑幽邃にして頗る野情に愜ふ。因って室数椽を築いて安眠燕坐す。只此に居して残喘の尽くるを俟つのみ」とあるは以上の次第をいう。

しかしながら、徳孤ならず、寂室林下の禪に参じる道衆が「憧憧として沓なり臻って松根石上に茅を誅りて散処す。蓋し物は類を以て聚ると理の然らしむる所以か」と、師をして言わしめる状況を現出するに至ったのである。道衆の一人に關西の薰聞叟なる禪衲がいた。師は、この僧の為人（ひととなり）が衆僧に超えているのを見て、かれの如きが真の禪人（ぜんにん）であると感歎し、事のわけをことばを尽して記したのが前文の要旨であって、師の偈頌に付された詞書の中で最も長文のものである。その大筋はわれわれ門外の徒にも理解されるのであるが、随所に耳慣れない禪語が用いら

れているゆえ、ひとまず解説を試みておく。

「撓草瞻風」は、景德伝燈録、「洞山价、潞山に参ず」に出ており、無明の荒草をはらい、仏祖の家風を仰ぎ見るの意で、この世の煩惱を断ち切って菩提を求めるをいう。

「波を撓いて火を求むる」は、顛倒妄想も甚だしい意を喩えた語と考えられる。即ち、自己の心身に求めることをせず、他の見聞に従属することは菩提心を枯らすのみでなく、因縁生の煩惱妄想を増長させることだと言っているのである。仏心宗の悟道は個の覚醒にある。それは自己の身心を以て仏を修証することであって、ただ師家の言行や経論によって外から与えられるものではない。

「柳栗横に担ひて、人を顧みず、直に千峰万峰に入り去る」は、前節の「僧のためには須らく是れ巖谷に居すべし」を受けてのもの。この語は、碧巖録、第二五則、「連華峰柳栗」の本則に出ている。即ち、縦に突くべき錫杖を横にひっかけ、脇目も振らず、直ちに千峰万峰の山谷に入っていく、その跡形をもとどめずなるとの意である。

偈頌は、前文に韻を次いで、禪衲薰聞叟の行を励ましたもの。その二十八言は、西山亮も南嶽瓊も遠い昔の人となつて、その跡を隠した山中にはただ幽谷と白雲を見るばかりである、今にして瓊亮の高風を追慕してやまない者は、独り深山の巖下に隠れ棲む君を尋ねて行くことである、と唱えている。

南嶽瓊は、唐の高僧瓊瓊のこと、湖南省の南嶽（衡嶽）の石窟に隠れた。既述の偈頌「寒夜の即事」のところで、その行実に触れておいた。

西山亮は、馬祖道一の法嗣で、江西省洪州（南昌）の西山に隠れて跡を絶った。亮座主が馬祖に参じた公案は『景德伝燈録』卷八に次のごとく記す。「馬祖問ふ、什麼の經をか講ず。師云はく、心經。祖云はく、什麼を將つて講ず。師云はく、心を得て講ず。祖云はく、心は工伎兒の如く、意は和伎者に似たり、六識は伴侶たり、争か經を講得することを解せんや。師云はく、心既に講不得ならば、是れ虚空講得すること莫しや。祖云はく、却つて是れ虚空講読す。師拈袖して去る。祖召して云はく、座主と。師、首を回す。祖云はく、生より死に至るまで只是れ這箇。師因つて省有り。「工伎兒」は主役（シテ）の意、「和伎者」は脇役（ワキ）の意、「六識」は六境を認知する識で、眼・耳・鼻・舌・身・意をいう。伴侶（ツレ）の意。

馬祖は、亮座主が經論という外来底に繫縛されて、赤裸裸、淨洒洒の境界に入っていないことを厳しく突き上げたのである。

『五燈会元』卷三にも同趣旨のことを記している。その結末のところを抄出すれば、「師肯はず、便ち出でて將に塔を下りんとす。祖召して曰はく、座主と。師首を回らす。祖曰はく、是れ甚麼。師、豁然大悟し便ち礼拝す。祖曰はく、這の鈍根の阿師、礼拝作麼。師曰はく、某甲講ずる所の經論、將に謂ふ、人の及び得ること無しと。今日、大師の一間を被りて、平生の功業一時に氷解し、礼拝して退くと。乃ち洪州の西山に隠れて更に消息なし」とある。「この鈍根の和尚さん、何ゆえの礼拝か」の一揆はまことに手きびしい。笑中刀ありである。

寂室禪師が禪人薰聞叟に与えた前文と偈頌は仏心宗の禪道のギリギリ

の当処を一括しており、師門の機々相契った消息を痛的に感受させるものである。